



中村 紘子

Hiroko Nakamura

Profile: 第28回音楽コンクールに史上最年少で優勝しデビュー、以来、国内外での演奏は3,500回を超える。出版したレコードは40点を上廻り、処女作『チャイコフスキー・コンクール』は、第20回大宅壮一ノンフィクション賞受賞のベストセラーとなった。数多くの国際コンクールの審査員を歴任する一方、浜松国際ピアノコンクール審査委員長として若手ピアニストの育成や紹介に尽力する。平成20年紫綬褒章、同21年日本芸術院賞・恩賜賞を受賞。2009年秋には、デビュー50周年を迎えた。

演奏も料理も長い間手間暇かけて準備をしても演奏は一瞬で終わるし、料理も一瞬で食べられてしまうのです

巷はそろそろ秋。今回、ご登場願ったのはまさに「芸術の秋」にピッタリの女性。日本のピアニストの代名詞とも言われる中村紘子さんです。日本は言うに及ばず、世界的にも名声を博す彼女は、今年がデビュー50周年。自らの演奏にとどまらず、国内外の音楽コンクールでの審査員、また若手ピアニストの育成にもご尽力され、さらには数々のボランティア活動やエッセイなどの出版活動、彼女の活躍は八面六臂、常に各界の第一線で注目され高く評価され続けています。長年の演奏活動に関しては、日本芸術院賞、恩賜賞、紫綬褒章を初めとして様々な賞を受賞されています。今回は、中村紘子さんの今をひも解くために、まずはピアノとの出会いから伺い、そして今の日本、料理、50周年記念アルバムなどについてお聞きしました。

何もなければこそ教える側は大きな夢を燃やした

——中村さんがピアノを始められたきっかけから教えていただけますか。

戦後、東京が焼け野原だった頃に「すべてを戦争で失った日本に、未来を担う子供たちを育てよう」と、『子供のための音楽教室』という、本当に小さな、週に1回開かれる寺子屋みたいなものが当時の若い優秀な音楽家たちによって開かれたのです。或る女学校の教室を借りて始まったのですが、それがちょうど私が3歳くらいのことでした。その第1回の面接試験に行くと、そこに当時名教師として名高かったピアノの井口愛子先生が面接官でいらして、先生の坊ちゃんと私が同年だということもあってか、先生の関心をとても惹いたようです。それが井口先生との運命の出会いでした。

——「子供のための音楽教室」はどんな感じだったのでしょうか。

とりあえず、幼稚園に行くくらいのもりで入ったのですが、そこはとて素晴らしい集まりで、初期に学んだ子供たちの中には、小澤征爾さんや高橋悠治さん、母校・桐朋学園の学長となられたチェロの堤剛さんなど、今や日本の各分野を代表する方たちがいました。今思えば、先生方の夢は実現したのですが、教える先生方もまだ二十代三十代、2006年に音楽評論で初めて文化勲章を受賞された吉田秀和先生が初代の室長先生でした。でもね、私も含め、その教室に決して凄い才能のある特別な子供たちが集まったというわけ

ではないのです。戦争が終わってあらゆる価値観が逆転して、虚脱状態のような日本の中で、何もなければこそ教える側は大きな夢を燃やした。それが音楽に対する理想の夢で、先生方は無私無欲で情熱を傾け、それに子供たちが引っ張られた。そんな感じでした。人間というのは、やはり、夢や理想を大きく掲げることがいかに大切かという、これは好例ですね。

——時代というのが関係していますか。

1970年の大阪万博以降、あらゆる面で日本は変わってきたと思うのです。あれは第二の黒船だったと思います。言い換えると、日本が経済大国としての地位が固まったんですね。もっと具体的に言うと、外貨が自由化され、それをきっかけに、どって日本人が外国へ出かけるようになり、情報も外国から多く入ってくるようになりました。それまではある程度閉鎖社会で、例えば一流の音楽家を外国から招くこともできなかったわけですが、それがどんどんできるようになりました。これによって、様々な価値観を知ってしまい、結果として、権威の崩壊を招くことに繋がった。1つの絶対的価値観というものなくなってしまったのです。

才能と努力と、時代という幸運

——その弊害は音楽表現にも及びますか。

芸術というのは現実の生活の中で結ばない夢、手にできない夢を、

音楽家の場合は音に託す。作曲家の場合は作品に託す。そういうエネルギーが必要なわけですが、今の若い人たちにはそれがあまりないのです。それには理由があり、みんながみんな猛勉強しても、一線の音楽家として一流のチャンスを得ることができるとは限らないということ、情報によって学習してしまったのです。才能と努力は必ず必要で、あと一つ大成するには、幸運が要るのです。これは時の運ということも含めてですが、一生懸命やったところで、今の時代、誰もが幸運に恵まれて一流の音楽家になるとは限らないわけです。これを親の代で学習してしまった。音楽というのは、初期が肝心で、ごく子供の頃の教育が重要なのです。それが充実すれば、みんな10代の半ばくらいでかなりの高度な音楽水準に達するわけです。それが今は、音楽に夢を燃やさないとか、親もそういう意味での大きな夢を託さない、だから若い人たちの音楽には深みがなく、聴衆を感動させる説得力もないのです。ただ表面的な技術先行の演奏だけになってしまう気がします。

クラシックの世界は大衆化しきれない

——それは日本に限ったことなのでしょう。

実はそれがいち早く始まったのが60年代のアメリカです。いわゆるWASPと呼ばれる中産階級から上の、特に優秀な男性は、ピアニストなんて目指さなくなりました。だって効率悪いでしょう。幼少期からピアノのお稽古に明け暮れて、社会とも接触なく個室にこもって練習して、そして17、8歳で誰もが演奏家になって世界的なスターになれるかという、何の保証もないわけです。それだけの労力と時間とお金をかけるくらいだったら、ハーバード大学に行って医者になったほうが一生の生活は安定する。ピアノは趣味に留める。そして豊かな生活を楽しもう、と。70年代になるとヨーロッパも生活が豊かになり、私たちが音楽の本場と思っていたところでは、才能のある子供たちはピアニストになろう、バイオリニストになろうと思わなくなってしまいました。日本は離れているせいか、このことはあまり分らなかったのですが、実際のところはヨーロッパでは違う民族・人種の方がハングリー精神を持って活躍していました。そしてそれに対抗して出てきたのがアジア圏の人たちです。とりわけアジアのハングリー精神と上昇気流に乗ったのが中国。ですから90年代頃から中国では、ピアノ・ブームが起こり、都会から地方にいたるまで、親は子供に夢を託し、一説によれば5,000万人の子供たちがピアノにフィーバーしているそうです。ところが、元々クラシックの世界というのは、そんなに広い分野ではなく、いくら大衆化しようとしてもしきれない部分があり、ごくわずかなコンサート・ピアニストがいればこと足ります。世界的に見渡しても何百人も要らないくらいだと思います。

——みんながみんな一流の音楽家になってしまったらそれこそ大変ですね(笑)。一方で、音楽を学ぶ環境というのは、日本の場合、どうなのでしょう。

今の日本は少なくとも音楽の技術を学ぶだけならば、外国に行く必要はありません。若くて優秀な先生もいますし、一流のコンサートもいっぱい聴けます。20年以上前、バブルが崩壊した後くらいから、音大の先生方がこうボヤクようになりました。「これからは、才能のある若い人たちに海外留学を薦められなくなりました」。ドイツの有名な学校に行っても、生徒の大半は海外からの人たちが、教えている先生も外国人ばかりです。それに、音楽会を開くための条件が整っているのは、他ならない日本です。バブルの時に、全国に3,000以上の素晴らしいホールができて、そこには真新しいピアノが入っている。コンサート数も世界有数です。ただ、芸術家の心を豊かに養うには、異文化の中でもまれ、刺激を受けることが大切です。今では「留学」とは、そのくらいの意味でしかなくなりました。

——世界のあらゆる料理、しかも一流の料理を食べることができるという今の日本の環境に、少し似ている気がします。

文化というのは富のあるところに栄えるといいます。最近、聞いた話では、上海のお金持ちの間ではロマネ・コンティをコココーラで割って飲むのが流行っているらしいですよ(笑)。これは笑い話ですが、成金のそういう時期を過ぎると、もっとリファインされて本当のものを知るようになるんでしょうね。私、フランス料理の日本の草分け的存在だった今は亡き辻静雄さんと非常に親しく、しょっちゅうご馳走になっていたのですが、彼はよく「本当の味が分かるには3代のジェネレーションが必要だ」とおっしゃっていました。

音楽も料理も一瞬で終わってしまう

——音楽と料理というのは何か共通するものがあるのでしょうか。

そうですね。演奏や料理というのは、長い間手間暇かけて、時には何年も仕込みをして準備をして、でも演奏は一瞬で終わるし、料理も一瞬で食べられてしまいます。そして後に残らない。

——「レストランひらまつ」や「オーベルジュ・ド・リルトーキョー」など、ひらまつのグループをご夫妻でご利用されていると伺っていますが、ご感想などはいかがでしょうか。

ひらまつさんと美味しい美味しいと言って食べていると、体重のほうがちよっと心配になってしまったりして…(笑)。それに今は、忙しいということもあって、正直なかなか行くことができないのが残念です。でもね、昨年、紫綬褒章を頂いた際に、友人たちが銀座の「アルジェントASO」でお祝いしてくれましたのですが、これは本当に素晴らしいお料理でした。感激いたしました。

——ひらまつの料理を音楽的に例えるとどういった感じでしょうか。

平松さんご自身が作られた料理というのは、エネルギーが溢れていて、ひとつひとつの味が充実していて、見た目にも華麗で豪華で、凄く迫力がありますね。



今の私の演奏を聴いて頂きたい

——最後になってしまいましたが、2008年の紫綬褒章、今年の日本芸術院賞および恩賜賞に加え、秋はデビュー50周年ということで、本当におめでとうございます。9月16日には『デビュー50周年記念アルバム(10枚組)』が発売されるそうですね。それはどんなアルバムでしょうか。

50周年と言っても、過去を振り返るのではなく、今の私の演奏を聴いて頂きたいという思いがあったので、この2年半くらいかけて演奏を録音していたのです。世界的に見ても、クラシックのピアノの録音ができるスタジオは年々少なくなっているのですが、ドイツのベルリンにTELDAXスタジオというところがあり、そこで素晴らしいプロデューサーに出会いました。音楽的にもすっかり意気投合し、今回そこで新たに録音をすることができました。それで、最初はベルリンに行っていたんですが、そのうちに軽井沢に大賀ホールというところができ、そのこけら落としに招かれた際、「TELDAXスタジオと容積も同じくらいだし、ここのホールは録音にも使えますね」ということになり、多忙ということもあって、後半はそこで録音することになりました。TELDAXのスタッフにも来て頂き、大賀ホールで2、3か月に1回くらい録っていました。録音というのは、とても神経を使うのですが、その合間にはコンサートもあり、ここ2年半は、まるで受験生みたいひたすら練習の日々でした(笑)。

——50周年記念の演奏会がこれからも続くと思いますが、どうぞお身体にお気をつけください。

演奏会は50年間やっていることなので大丈夫です。9月19日には東京のサントリー・ホールで50周年の演奏会があり、その後も全国47都道府県の代表都市での演奏会は続いています。ひらまつさんにもなかなか伺えなくて、ごめんなさいね(笑)。